

非日常的状态から学ぶ生き抜く力

The Survived Power Learned from the Extraordinary Position

佐藤実芳

Miyoshi SATO

はじめに

日本では、2020年4月7日、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づく「緊急事態宣言」が東京・大阪など7都道府県に対して発出された。その後4月16日夜には、5月6日までの期間、その対象地域を残りの全県に拡大してなされることが正式に決定された。5月14日に至って47都道府県のうち39県で新型コロナウイルス対策の緊急事態宣言が解除され、5月25日には漸く日本全土で緊急事態宣言が解除された。

ところで、それに先立つ3月2日から、全国全ての小学校、中学校、高等学校、特別支援学校において、春休みまでの臨時休業が行われた。その後、緊急事態宣言の発出により、その休業が5月まで継続されることになった。不要不急の外出の自粛が国民に求められ、企業等でもテレワークを活用した自宅勤務が推進された。また多くの施設・店舗の休業やイベントの中止が要請された。

新型コロナウイルスの感染は終息することなく、今日に至っている。厚生労働省のHPには、新型コロナウイルス感染症専門家会議からの提言（5月4日）を踏まえ、新型コロナウイルスを想定した「新しい生活様式」が具体的に提示されている¹⁾。

以前より教育の分野では、「非認知能力」が注目を集めているが、今日のような非日常の事態に陥った時にこそ、私達が持っている非認知能力というものが発揮できるのではないかと考える。本稿では、非日常の状態における非認知能力がなした事例として、板東俘虜収容所でのスペイン風邪対策と、熊本地震で壊滅的な被害にあいながらも人的被害を最小限に抑えた熊本県阿蘇郡西原村を検討した後に、非認知能力を育成する場の一例として三重県桑名市の石取祭の教育的役割を分析する。

1. 板東俘虜収容所でのスペイン風邪対策

(1) 板東俘虜収容所

1917年4月9日、第一次世界大戦において、中国の青島で日本と戦って敗れ、俘虜²⁾となったドイツ兵（一部オーストリア・ハンガリー帝国兵士を含む。）を収容するために、徳島県板野

郡板東町（現：徳島県鳴門市大麻町）に「板東俘虜収容所」が開設された。同収容所には、長さが72.9mの建物8棟が建てられ、約1,000人のドイツ兵俘虜が生活していた。一人当たりの居住面積が4.7㎡という狭い空間での長期間の収容所生活は、ドイツ兵俘虜にとって肉体的にも精神的にも健全でいられる状況とは言えなかった。しかも、戦況は悪化の一途を辿っていた。拙稿「板東俘虜収容所におけるドイツ兵の“生き抜く力”」³⁾で、いつ解放されるかもわからない状況で、狭い収容所に長期間収容されたドイツ兵俘虜達が、心身ともに健康を維持することができた秘訣を明らかにした。

日本は、1886年に戦時における傷病者と俘虜に関する国際条約である「ジュネーブ条約」に加入し、日清戦争の俘虜を人道的に扱っていた。また、日露戦争では、「陸戦ノ法規慣例ニ関スル条約」に基づき、俘虜になったロシア人に対して日本の29か所の収容所において極めて人道的な扱いをした。このような経験から、軍人には国際法を遵守した俘虜の扱いの教育が徹底して行われ、第一次世界大戦のドイツ兵俘虜も人道的に扱われた。

徳島俘虜収容所と板東俘虜収容所で所長を務めた松江豊寿（1872年 - 1956年）は、ドイツ兵俘虜の権利を最大限に尊重し、彼らができる限り快適に生活することができるように配慮した。同所長の姿勢に収容所の職員たちも賛同し管理運営に携わったため、板東俘虜収容所は「模範収容所」と評価されている⁴⁾。

（2）健康ナル肉体ニ健全ナル精神宿レカシ

1917年9月30日付けで発刊された週刊収容所新聞『ディ・バラック』の巻頭を飾った記事が「板東のスポーツ」である。「健康ナル肉体ニ健全ナル精神宿レカシ」というラテン語の諺を引用して、「われわれの収容所ほど、このことわざが重視されるところは他にないであろう。」と、自由を奪われた俘虜という立場で良好な精神状態を保つためには、運動をして健康を維持することが大切であると主張されている。狭い俘虜収容所で生活することにストレスを感じない人間はいない。しかも、戦況は悪化の一途を辿るような状況が続けば、精神的に病んでしまうことも人間として自然なことである。しかし、ドイツ兵俘虜は、運動することによりまず身体的な健康を保ち、ストレスを発散させた。

入所直後から体操や歩調をそろえた大股での歩きを行い、広い運動場が整備された後はシュラークバル、サッカー、ホッケー、バスケットボール、ファウストバル、テニスなどのゲームスポーツの他、体操や陸上競技にも熱心に取り組み、「自らの肉体のため、そして祖国ドイツのために再び若々しく、熱心に取り組みを始めることを望みたい」と、万全な体調の維持に努めていた。1918年11月にドイツが降伏したことで外出の規制がなくなり、翌年1月から遠足や競歩大会、水泳祭などが実施された。スポーツ以外にも、音楽活動、演劇活動、講演会、出版活動、図書館などの文化的な活動の他、作品展を開催してドイツの文化水準の高さを披露したり、アーチ型の石橋造りに専念した。

ドイツ兵俘虜は、自主的に様々な活動を実践して俘虜生活の時間を有効に活用し、解放後の生活に備えていた。そして、祖国であるドイツの敗戦の兆しが強まっても、常に前向きな姿勢で共

同生活を続けた。敗戦に至っても、これからドイツの為に何をする事ができるのかを真剣に考えていた。この前向きな姿勢こそが、ドイツ兵俘虜が長期間に渡る収容所内での生活を、心身ともに健康に生き抜いた鍵だと考えられる。

(3) スペイン風邪の流行

スペイン風邪とは、1918年から1920年にかけて世界的に流行した強い感染力を持ったA型インフルエンザで、第一次世界大戦中の欧州各国が情報統制する中で、中立国だったスペイン政府だけが公表した為に、「スペイン風邪」と名付けられた。日本での第1回目の流行は1918年8月下旬から9月上旬より始まり、11月に患者数・死亡者数が最大となった。第2回目の流行は、1919年10月下旬から始まり、1920年1月に患者数・死亡者数が最大になった。内務省衛生局発行による『流行性感冒「スペイン風邪」大流行の記録』には、「総患者数二千三百八十万四千六百七十三人、死者三十八万八千七百二十七人、即ち人口千に対し患者415.865人、死者6.75人なり、本調査に漏れたる患者多数あるべきを以て実際の患者数は遥かに多数なりしならん」⁵⁾と記載してある。

板東俘虜収容所内のスペイン風邪の流行に関しては、『ディ・バラッケ』第3巻第10号（1918年12月8日）に「収容所におけるスペイン風邪の推移」として報告されている。その冒頭にスペイン風邪に関して、以下のように記されている。

「スペイン風邪に関して、ここでは二つのことがはっきりしていた。第一には、スペイン風邪から収容所を守ることは不可能であろうということ。第二に、もしいったん侵入したらたちまちにして蔓延するであろうということである。いずれにせよ健康保険組合は10月末頃にはすでに、大忙しになることを予想していた。」⁶⁾

同収容所内のスペイン風邪の新規患者は1918年11月15日より急増し始め、11月19日の107人をピークに減少した。患者数が最多であったのは11月21日の324人であった。最後の新規患者が確認されたのは12月2日で、11月9日から1カ月弱の間に678人がスペイン風邪に感染し、3人が死亡した。同収容所では、11月8日に軍医がスペイン風邪を発症して治療の為不在となり、その後スペイン風邪に対応したのが健康保険組合であった。

(4) 健康保険組合

『ディ・バラッケ』第1巻第19号（1918年2月3日）によると、1916年に丸亀俘虜収容所で誕生した保険組合を発展させて、1917年4月20日に板東俘虜収容所内に収容所保険組合が誕生した。保険組合の基本思想は、『ディ・バラッケ』に以下のように記されている。

「保険組合の基本思想は、収容所のすべての援助の必要な貧しい病人に適切な病人食、強壮剤、その他日本側から供給されない薬剤の支援を与え、病苦の軽減をはかることであり、一般的

には病気の戦友たちを常に援助して、彼らの運命の重荷を軽くし治療を促進することである。」⁷⁾

保険組合は、「一人はすべての人のため、すべての人は一人のために」を原則とし、すべての俘虜による募金の他、東京救援基金からの援助、板東ボーリング場などからの寄付等で活動資金及び寄贈品を得ていた。組合の活動として、患者と回復期患者への給食の他、軽度の病気や怪我の治療を目的とした2つの薬局を開設した。薬局の運営は、医学と薬学の専門教育を受けた俘虜の指導下におかれた。

スペイン風邪流行の際には、最初に予防のために過マンガン酸カリウムを用いたうがいを奨励し、収容所外への出入りを最小限に制限した。健康保険組合の指示は絶対的で、俘虜達は進んでその指示を遵守し、率先して多くの俘虜がスペイン風邪の患者の看護等に必要の仕事を行った。

患者の急増で医務室では収容しきれず、兵舎の1号棟と水晶宮と呼ばれていた食堂を「サニタス」と名称を変えて病院とした。11月18日には「公会堂講義室」に、患者の世話をする俘虜の仕事を統括するための案内所を設け、新規患者の情報がカード目録として収集された。ここで、病人食、薬、強壮剤等の調達を一括して行った。

軽症者は兵舎で仲間たちによる世話を受けて療養し、重症者は病院で優先的に治療を受けた。とはいえ、日本人医師による診察は11月19日まで受けることができなかった。その後、軍医の往診5回に加え、所長の配慮で民間の医師の往診を何度か受けることができた。所長の手配により、治療や療養に必要な食品及び薬品などの調達やスペイン風邪による高熱を下げるために必要な氷を確保する為に遠方まで買いに行く使用人の雇用を行い、また俘虜が体温計を購入するための外出の特別許可が出されるなど、同収容所関係者全員が一体となってスペイン風邪の治療に専念した。

また、病後の再発防止のために、スポーツが禁止され、運動場が閉鎖されるという措置が取られた。さらに、吹奏楽器も肺に負担をかけるため病後には危険ということで、音楽活動もしばらくの間自粛することになった。

病気になっても安心して療養することができる自助組織が存在し、スペイン風邪流行の際には組合が出した的確な指示に俘虜達が従ったことで、同収容所の死亡者数を最小限に留めることができたといえる。

2. 熊本地震

(1) 熊本県阿蘇郡西原村

熊本県阿蘇郡西原村は、阿蘇外輪山の西側にある人口約7,000人の村である。同村は、2016年4月の熊本地震の震源となった断層の直上に位置している。4月14日の前震では、西原村は最大震度6弱を観測したものの大きな被害はなかった。しかし、18日の本震では最大震度7を観測し壊滅的な被害（家屋被害は、村内2,466棟の内、全壊513棟（20.8%）大規模半壊198棟（8.0%）半壊659棟（26.7%）一部損壊1,096棟（44.4%））を受けながら、死者8名（うち災害関連死3名）、

負傷者 56 名（重傷者 18 名、軽症者 38 名）と、人的被害を小さく抑えることができた⁸⁾。

同村は 6 地区（古閑、大切畑、風当、畑、下小森、布田）に分かれている。大切畑地区（23 世帯 88 人）では、本震で生き埋めとなった 7 人を 2 時間程度で住民が救出して一人の犠牲者も出さなかった。このことにより、「奇跡の集落」⁹⁾と呼ばれている。

村内には、熊本市消防局の出張所（6 名）及び県警大津署の駐在所（1 名）しかなく、熊本地震では地元の消防団が中心となって、村民の安否確認及び救助活動を行った。避難所も、自治体職員だけでは運営することができないため、村民が各自の得意分野を生かした役割分担で自主運営を行った。村内のどの地域においても、避難所で支援を待つのではなく、村民自らの力で復興に向けての活動が迅速に行われた。その記録として、2019 年 4 月、西原村 6 地区の熊本地震被災体験の『記録集』が出版された。

(2) 各地区の自治

同村では、地区ごとに自治組織がある。例えば古閑地区の場合、地区の代表が「区長」、現金の出納・保管をするのが「会計」である。公民館の管理責任者である「文館長」、村からの健康診断や狂犬病予防接種等の連絡及び健康診断の参加者の取りまとめをするのが「衛生班長」である。高齢者の「老人会」は、公園の清掃や地区のごみ拾い等を行っている。「子ども会」は、親子同士が交流する会で、廃品回収を手伝っている。女性の集まりである「婦人会」は、公民館の大掃除や地区の花の手入れなどをしている。男性は、消防団の活動を通して活躍している。

同村では地区ごとに伝統的なルールがあり、行事や「寄り合い」等、様々な世代の人が協力して行っている。共同作業が必要な際は、全員で集まり作業をする団結力がある。冠婚葬祭も隣保組（近隣）で助け合い、大変な時はお互い様という意識が育っている。古閑地区の場合、全世帯が参加するのが、古閑初寄り（元旦にその年の役員や行事を決める集まり）、春の道路公役（5 月第 2 日曜日の道路の草刈り）、川祭り（鳥子川の清掃で大雨対策のための葦切り）、朝区役（8 月第 1 日曜日の道路の草刈り）、宮ごもり（鳥子三之宮神社に交替で籠り、無病息災を祈る）である。草刈りや清掃の後は、慰労会が開催される。この他に、1 月の出初め式や 3 月の第 1 日曜の俵山の山焼きなど、村全体で実施される行事の他、1 月中旬のどんどや（正月飾りを燃やす伝統の火祭り）、3 月 15 日の山の神祭り（御神木にお供えして、その前の土俵で子どもが相撲をとる）、8 月 14 日の夏祭りや 10 月中旬の運動会など、区民全員が参加して楽しむことができる行事も多くある。西原村の人々は、行事や共同作業を通して、規律ある集団行動や社会規範を身につけているだけでなく、忍耐力、協調性、実行力といった非認知能力が、子どもの頃から自然と育まれている。

(3) 熊本地震

同村内で熊本地震の際、最も迅速に自力でライフラインを確保したのが古閑地区である。古閑地区では日ごろから集合場所を公民館と決めていたため、本震後、地区の住民全員が公民館に集まり消防団が所有していた名簿で安否確認を行い、安否確認ができない人の搜索を行った。本震

後1時間程度で近くを流れる川の音が変わり、「上流ダム決壊の恐れ」の情報により高台に全員で避難した。その後公民館に再度集まり、小学校に移動して避難生活に入った。

17日は公民館で朝礼があり、全員で役割分担を決めて行動した。断水していたため、はじめは地震の影響を受けなかった旧水道の水源に水を汲みに行っていたが、公民館に水を引いてライフラインを確保し、シャワーとトイレを設置した。そして18日には、銭湯も設置した。『記録集』には、「古閑には、水道屋、電機屋、大工にパン屋、いろんな人がいる。重機もある。あるもの、得意な事を集めて、公民館でライフラインが整った。」¹⁰⁾と記されている。本震直後に道路が壊れて危険であることから、自宅から工場に戻ってタイヤショベルで道路の瓦礫を片付けながら、しかも歩いて避難している人のためにライトで照らしながら進んだ藤田保生氏や、電気を供給するため仕事で使用している工業用発電機を熊本市まで取りに行った田上貴浩氏などが『記録集』で紹介されている。想像を超えたマンパワーである。

食事の炊き出しは、食材を持ち寄り女性が本震の翌日から行った。男性は、消防団の活動が優先で「みんな自分達のことよりほかの人たち」という意識で頑張ったという。夜間は、防犯のため地区の見回りをした。そして昼は倒壊の危険のある建物等の解体作業を行った。救援を待つのではなく、自助そして共助の精神で全員が立ち向かったことがわかる。

(4) 避難生活

『記録集』に、避難所生活が楽しかったという表現が多々ある。例えば避難所の一つであった西原中学校の体育館での避難所生活の特徴が、世帯ごとの仕切りをつくらなかったことである。役場職員が「いいコミュニケーションになっとるけん、この方がいいんじゃない？」と言ったからと、下小森地区の『記録集』には記されている。仕切りがないため、プライバシーがないかわりに、普段は挨拶程度の関係の人たちともコミュニケーションがとれて、楽しい避難所生活であったという。拙稿「西原村の底力」¹¹⁾で避難生活について検討した。地震を体験した恐怖で精神的に傷ついていたであろう子ども達が、避難所で修学旅行気分を楽しむことができたのは、行事や共同作業で培われた力が子ども達の心のケアにも繋がったと考えられる。

「中学生くらいの子ども達が、修学旅行気分仲間同士集まって囲いを作ってから、夜遅くまで騒いどった事もありました。あと、中学生が小学生の遊び相手をしてあげたり、避難所内に子ども達が勉強できるようにと、勉強スペースができていましたが、『あそこで勉強せよ』って高校生の娘に言ったら、すぐ戻ってきて、小学生が騒いだりテレビがあったりで『とても勉強できるような状況じゃない』って、私の横で勉強をしていました。子どもが段ボールの机で勉強しとるのを見とったら、なんか自分も頑張らにゃって思いました。」¹²⁾

避難生活が楽しかったというのは、避難所だけでなく、テント生活をした村民からも語られている。2人の子どもとキャンピングカーで避難生活をした布田地区に住む夫婦の場合も、子どもはキャンプをしている気分だったのかもしれないと語っている。¹³⁾

子ども達だけでなく、大人でも『記録集』に避難所生活が楽しかったと記している。布田地区の女性は、以下のように述べている。

「避難所生活の中で困ったこととかは逆になかったんですよ。楽しいという言葉を使っちゃいかんけども、田子屋北の皆が一緒だったので周りに一杯話せる、遠慮なく話せる人が沢山いたので、『婦人会の旅行みたいね』って話していた時もあったんです。」¹⁴⁾

避難所生活やテント生活した男性は、飲酒して楽しい時間を過ごしたことを記録している。近所で集まってテント生活をしていた布田地区の男性は、以下のように避難生活の楽しさを述べている。

「テント村では、炊き出しの時は、皆と集まって食べてましたね。そえて、酒が増えるんですね。笑おうとかな、しょんなか（仕方がない）ですけんね。9時とか、10時くらいまで喋りよるけんですね。いつもは、8時半か9時には寝るばってん。皆が集まっとるけん、なかなか会話が途切れんもんだけんですね。集まって、ご飯食べると楽しいけんですね。」¹⁵⁾

長い避難生活の中でも、子ども達が比較的楽しく過ごすことができた理由としては、大人の「とにかく何とかしないと・・・目の前のことをとにかくやる。不安なんで感じない」という前向きな姿勢と、地区全員が一致団結して精神的に安定していたため、子ども達にもそれが伝わっていたのではないかと考えられる。また、地区の住民が、日常的に多くの行事や祭を実施し、終了後には飲食を共にしていたため、避難生活がその延長上にあったように感じられる。

3. 三重県桑名市の石取祭

(1) 石取祭

2016年12月1日、日本が誇る祭礼「山・鉦・屋台行事」がユネスコ無形文化遺産に登録された。その中に三重県桑名市の石取祭が含まれている。江戸時代初期に始まった祭事で、天下の奇祭とも、日本で最もやかましい祭とも言われている。それは、午前0時から、町会ごとに大鉦と大太鼓を打ちならしながら祭車を曳きまわすという、夜の祭である。伝統的な神事ということから、以前は成人男性中心の祭事であった。大人の度を越えた飲酒を伴う点も、子どもにとって健全な祭とは言いがたい。教育的な視点から考えれば、石取祭は非教育的な祭事と言わざるを得ない。

ところで、小林寿一の「我が国の地域社会における非行統制機能について」¹⁶⁾によれば、祭事を含めた地域の教育力が少年の非行防止につながっているという。また、石濱照子の「自殺増加の要因とその抑制に向けての一考察 ―『宗教性』をめぐる―」¹⁷⁾では、祭事は自殺の防止にもなると指摘されている。このように近年、祭事の青少年に及ぼす教育的意義が注目されるようになってきた。

しかし、少子高齢社会の日本における多くの地域では、青少年の減少により伝統的な祭事の継

承が困難になってきている。桑名市の石取祭も例外ではなく、祭事の中心的担い手である町会に在住する青少年の減少で、その継続が危ぶまれている¹⁸⁾。町会によって年齢の区分は異なるものの、石取祭の将来の担い手となる「少年会」(町会によっては、少年少女会、子供会と呼ぶ。会員は、乳幼児から中学3年生。)と、「青年会」(町会特有の呼称がある場合もある。会員は、中学校卒業後から30歳～40歳の男性。)、それぞれを構成する人数が、以前に比べて少なくなっているのである。

(2) 西鍋屋町石取祭継承会の西鍋屋町石取祭継承者育成事業¹⁹⁾

石取祭に参加する町会の一つである西鍋屋町の場合、町内在住の子どもの減少は、数年後には祭の中心的存在である青年会の会員の減少と直結するため、少年会の会員の確保は祭を存続させていくために重要な課題と捉えてきた。とはいえ、人の移動の少ない小規模な町で、少年会の会員を増やすことは容易なことではない。町内在住の子どもの誕生数の増加を期待することができないからである。西鍋屋町の自治会の世帯数、居住者数は共に減少している。石取祭の中心的担い手となる青年会の人数も減少しており、以前は30歳までであった上限年齢を40歳までに延長することで、会員の人数を確保しているという、危機的状況にある。

2018年度、西鍋屋町では石取祭のない町に住む子ども達を少年会の会員として迎えた。町内に在住していない子ども達が「少年会」に入会しやすいように、「少年会」だけでなく町会全体の運営方針も含め、現代的な視点で検討のうえシステム化された。少年会が鼓鉦を担当する時間を決め、その間は町会が少年会の会員に責任を持つため、祭事の運営に関しては、綿密なタイムスケジュールが組まれた。

2019年度は、5月から鼓鉦練習会を開催することにより、少年会の会員の鼓鉦を奏でる技術を向上させ、石取祭ばやし優勝大会子供の部に出場することができた。しかも出場した21チーム中5位を意味する上田染工敢闘賞に輝いた。

石取祭は隔年で最終日の祭車の整列場所が変わり、昼間の移動距離が大きく異なる。2018年度は、炎天下で少年会が鼓鉦を奏でて移動する距離が短かったが、2019年度は3km以上の距離を移動しなければならなかった。その為、環境省の熱中症予防情報サイトの「夏季のイベントにおける熱中症対策ガイドライン2019」等の情報及び公益財団法人日本スポーツ協会の「スポーツ活動中の熱中症予防ガイドブック」を参考に、「暑さ指数(WBGT)」²⁰⁾に基づき、少年会の活動方針を定め、徹底した熱中症対策を町会全体で実施した。

(3) 教育的意義

単に石取祭に参加するだけでなく、鼓鉦の練習から始まる長期間に渡る活動だからこそ、子ども達は深い人間関係を築くことができ、豊かな体験をすることができるといえる。2年間の事業を通して、石取祭への参加には以下のような教育的意義が認められた。

- ① 鼓鉦を奏でる技術の向上及び厳しい環境でも最後まで鼓鉦を奏で続けることができたことで、達成感及び充実感を感じることができる。

- ② 炎天下の集団行動及び鼓鉦を奏で続けることにより忍耐力が身につく。
- ③ 異年齢集団の活動を通して、コミュニケーション能力や社会性が身につく。
- ④ 町の大人に常に見守られ、祭車周辺は安全が保障されている状態で2日間過ごすことにより、様々な人と親密な人間関係を構築することができる。
- ⑤ 年齢集団ごとに役割分担があるため、「少年会」の会員としての役割を理解すると共に、人生における自らの位置づけを確認することができる。
- ⑥ 町会の熱中症対策をはじめとする様々な安全対策の実施で、危機管理能力が身につく。

以上、鼓鉦を奏でる技術以外は、非認知能力である。石取祭は伝統的な祭ゆえに、合理性を追求することが難しい。昔から受け継がれてきた伝統の中にこそ、子ども達の新認知能力を育成する教育力がある。

おわりに

現代の私たちは、地域の行事や共同作業などを、無意味なものと感じて敬遠する傾向がある。しかし、行事や共同作業を通して、規律のある集団行動や社会規範が身につく、忍耐力、協調性、企画力、実行力といった非認知能力が育つのである。その中で培われる力は、緊急事態に陥った時にこそ発揮されるものである。

板東俘虜収容所では、ドイツ人俘虜達が厳しい戦況を知りながらも常に前向きな姿勢で心身ともに健康を保ち、スペイン風邪が流行した際には自助組織で死亡者数を最小限に抑えることができた。熊本地震でも、西原村の村民が、震災直後は人命救助に尽力し、その後は復興に向けて最大限の力を発揮した。西原村が「奇跡の集落」とよばれたのは、年間を通して様々な行事や共同作業があり、村民全員が参加していた成果である。地震の被害にあっても、いつも実施されている行事や共同作業の如く、心と身体が動いたと考えられる。そして、自分達でやり遂げたという達成感と充実感から、各地区の『記録集』の作成に結び付いたのであろう。

行事や共同作業でどのような能力が育成されるかに関しては、三重県桑名市の石取祭を例に検証した。伝統的な祭だからこそ、従来はその教育的意義など考えられることがなかった。祭のクライマックスを担うのは成人男性であり、中学生までの男女が会員である「少年会」に注目されることはなかった。しかし、その活動により子ども達の様々な能力が育成されるのであれば、「少年会」の存在意義も変わってくるであろうし、石取祭自体の評価も異なってくる。青少年の減少で祭の継続が危ぶまれているのは、本稿で取り上げた西鍋屋町だけではない。多くの町会が、「少年会」の会員の減少に直面している。石取祭以外にも、同様な状況に直面している地域の祭は少なくないはずである。

新型コロナウイルスの感染防止のため、2020年3月以降、3密を避けるために地域の行事や共同作業などが中止、もしくは縮小されての実施となっている。2020年度の石取祭も中止となった。順調に進んでいた西鍋屋町石取祭継承者育成事業にも、1年間という空白の時間ができてしまった。3年目の取り組みで、更にどのように子ども達が成長していくかを期待していた筆者にとっ

では、残念なことである。

新型コロナウイルス感染防止を日常生活に取り入れた「新しい生活様式」が推奨される今日、以前と同様に地域の行事や共同作業などを実施することは難しい。地域の行事や共同作業などで培われてきた子ども達の非認知能力が、以前同様に育成されるような配慮が家庭、学校そして地域社会でなされることを期待したい。

なお、本稿は日本教育学会第79回大会において「災害から学ぶ生き抜く力」として発表した内容である。

注

- 1) 厚生労働省 HP「＜「新しい生活様式」の実践例＞」
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000121431_newlifestyle.html
(2020年11月1日取得)
- 2) 俘虜とは捕虜と同じ意味である。第二次世界大戦まで、日本陸軍では捕虜ではなく俘虜と呼んでいた。公文書では、圧倒的に俘虜という言葉が使われていた為、本稿では俘虜という言葉を用いる。
- 3) 拙稿「板東俘虜収容所におけるドイツ兵の“生き抜く力”」、『愛知淑徳大学論集 一教育学研究科篇一』第10号、2020年、19-32頁。
- 4) パンフレット『「板東俘虜収容所」の世界展』の「収容所長 松江豊寿」の項目。また富田弘は『板東俘虜収容所 日独戦争と在日ドイツ俘虜』の51頁で、「このパンフレット（筆者注：『青島俘虜郵便必携』）は十八の収容所の開設のなかで一度だけ『模範収容所』（Musterlager）ということばを使っている。」と記している。
- 5) 内務省衛生局編『流行性感冒「スペイン風邪」大流行の記録』（東洋文庫778）、平凡社、2008年、109頁。
- 6) 『ディ・バラッケ』第3巻第10号（1918年12月8日）、137頁。
- 7) 『ディ・バラッケ』第1巻第19号（1918年2月3日）、241頁。
- 8) 熊本県西原村「西原村復興計画 みんなが憧れ、そして愛される三ツ星★★★のむらを目指して」、2017年、7頁。
https://www.vill.nishihara.kumamoto.jp/library/03_fukkou/fukkoukeikaku/nishiharamurafukkoukeikaku001ver.pdf（2020年9月23日取得）
- 9) 『西日本新聞』2016年5月5日朝刊において、「奇跡の集落 命守った絆」という記事で大切な地区が紹介されている。
- 10) 古閑編集委員 PCKK・都市技術・地域計画連合設計共同体編『平成28年 熊本地震 記録集 西原村 古閑地区』、2019年、5頁。
- 11) 拙稿「西原村の底力」、『愛知淑徳大学教志会研究年報』第7号、2021年。
- 12) 下小森編集委員 PCKK・都市技術・地域計画連合設計共同体編『西原村 下小森地区 熊本地震記録集 ～小集の絆で乗り越えた熊本地震～』、2019年、56頁。

- 13) PCKK・都市技術・地域計画連合設計共同体編『布和里 特別号 2016年熊本地震からのあゆみ 西原村布田地区』、2019年、104頁。
- 14) 同上書、49頁。
- 15) 同上書、120頁。
- 16) 日本犯罪社会学会『防犯社会学研究』第28号、2003年、39-54頁。
- 17) 日本生命倫理学会『生命倫理』第21巻第1号（通巻22号）、2011年、33-42頁。
- 18) 詳しくは、浅井亜矢子「桑名石取祭—組織と年齢階梯的役割の現状—」、伊勢民俗学会編『伊勢民族』第38巻、2009年、24-40頁を参照のこと。
- 19) 2018年度に関しては、拙稿「伝統的祭事の未来—桑名の石取祭を例に—」（『愛知淑徳大学教志会研究年報』第5号、2019年、83-94頁。）、2019年度に関しては「伝統的な祭事の新たな試み—石取祭の継承と非認知能力の開発—」（『愛知淑徳大学論集—文学部篇—』第45巻、2020年、67-79頁。）を参照のこと。
- 20) 暑さ指数（WBGT：Wet Bulb Globe Temperature）は、熱中症を予防することを目的とした指標で、単位は気温と同じ摂氏度（℃）で示されるが、その値は気温とは異なる。暑さ指数（WBGT）は人体と外気との熱のやりとり（熱収支）に着目した指標で、人体の熱収支に与える影響の大きい ①湿度、②日射・輻射（ふくしゃ）など周辺の熱環境、③気温の3つを取り入れた指標である。

主要参考文献

< 1. 板東俘虜収容所でのスペイン風邪対策 >

1. 岩井正浩「四国3収容所におけるドイツ軍俘虜の音楽活動」、藤井知昭 岩井正浩『音の万華鏡』、岩田書院、2010年、7-35頁。
2. 岩井正浩「歴史使用『板東俘虜収容所関係資料』によるドイツ軍俘虜の音楽活動」、『愛知淑徳大学論集—教育学研究科篇—創刊号』、2011年、1-16頁。
3. ドイツ館資料研究会編『どこにしようとそこがドイツだ』、鳴門市ドイツ館、2017年。
4. 富田弘『板東俘虜収容所 日独戦争と在日ドイツ俘虜』、法政大学出版局、2006年。
5. 鳴門市ドイツ館史料研究会編『ディ・バラッケ』第1巻、鳴門市、1998年。
6. 鳴門市ドイツ館史料研究会編『ディ・バラッケ』第2巻、鳴門市、2001年。
7. 鳴門市ドイツ館史料研究会編『ディ・バラッケ』第3巻、鳴門市、2005年。
8. 鳴門市ドイツ館史料研究会編『ディ・バラッケ』第4巻、鳴門市、2007年。
9. 棟田博『桜とアザミ 板東捕虜収容所』、光人社、1974年。

< 2. 熊本地震 >

1. 大切畑編集チーム PCKK・都市技術・地域計画連合設計共同体編『奇跡の集落 大切畑 ～H28. 4. 16熊本地震を振り返る～』、2019年。
2. 大切畑編集チーム PCKK・都市技術・地域計画連合設計共同体編『小さな集落ですが まと

まりは一番!! 熊本県西原村 大切畑地区』、2019年。

3. 古閑編集委員 PCKK・都市技術・地域計画連合設計共同体編『平成28年熊本地震 記録集 西原村 古閑地区』、2019年。
4. 古閑編集委員 PCKK・都市技術・地域計画連合設計共同体編『熊本県阿蘇郡西原村鳥子古閑での暮らしのご案内』、2019年。
5. 下小森編集委員 PCKK・都市技術・地域計画連合設計共同体編『西原村 下小森地区 熊本地震記録集 ～小集の絆で乗り越えた熊本地震～』、2019年。
6. 下小森地区編集委員 PCKK・都市技術・地域計画連合設計共同体編『西原村 下小森地区 ガイドブック Re:しもごもり』、2019年。
7. 西原村風当地区編集委員 PCKK・都市技術・地域計画連合設計共同体編『風の記憶 ～熊本地震を語る 西原村風当集落～』、2019年。
8. 西原村風当地区編集委員 PCKK・都市技術・地域計画連合設計共同体編『カザアテの暮らし方』、2019年。
9. 畑地区編集チーム PCKK・都市技術・地域計画連合設計共同体編『熊本地震からの復興記録集 西原村畑地区』、2019年。
10. 畑地区編集チーム PCKK・都市技術・地域計画連合設計共同体編『畑の暮らし方 西原村畑集落』、2019年。
11. PCKK・都市技術・地域計画連合設計共同体編『布和里 特別号 2016年熊本地震からのあゆみ 西原村布田地区』、2019年。
12. 布田地区編集チーム PCKK・都市技術・地域計画連合設計共同体編『布和里ぐらし 西原村布田地区』、2019年。

< 3. 三重県桑名市の石取祭 >

1. 浅井亜矢子「桑名石取祭の現状 組織と年齢階梯的役割一」、伊勢民俗学会編『伊勢民族』第38巻、2009年、24 - 40頁。
2. 石取祭車研究会編『祭車叢書 第貳輯』、石取祭車研究会、1985年。
3. 清源友香奈「和太鼓演奏における身体の体験—皮膚感覚・運動感覚・深部感覚の心理臨床学的有用性」、秋田巖編『日本の心理療法』、新曜社、2017年、45 - 98頁。
4. 桑名市博物館編『平成28年度ユネスコ無形文化遺産登録記念特別企画展「祭礼の美～石取祭と祇園祭～」』、桑名市博物館、2016年。
5. 公益財団法人日本体育協会『スポーツ活動中の熱中症予防ガイドブック』、2019年
https://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data/supoken/doc/heatstroke_0531.pdf
(2019年11月1日取得)。
6. 西鍋屋町少年会「2019年石取祭 西鍋屋町 少年会 活動要項」。
7. 西鍋屋町石取祭継承会「岡田文化財団への報告書文案」。
8. 細辻恵子「祭における変遷・変化 —桑名の石取祭についての覚え書—」、『奈良女子大学社

会学論集』第6号、1999年、189 - 199 頁。

9. 松岡義一「石取祭の心意気」、伊勢民族学会編『伊勢民族』第4巻第3号、1958年、17 - 18 頁。
10. 「ユネスコ元年 石取祭（下）」、『中日新聞』北勢版、2017年8月10日、朝刊、第12面。
11. 桑名石取祭保存会公式ホームページ <https://isidori.jp/> (2020年11月18日取得)。